

# 言語, 象徴遊び, 描画における象徴機能の発達水準に関する関係分析

—12～24 カ月の縦断研究—

山形 恭子

## EARLY LANGUAGE, SYMBOLIC PLAY AND DRAWING ACTIVITY IN THE SECOND YEAR CHILD.

Kyoko YAMAGATA

This study examined temporal correspondences between the emergence of categories in early language, symbolic play and drawing, based on a longitudinal observation of a girl from 12~24 months of age. The main results were as follows: There were the correspondences between the onset of categories of language and symbolic play (the emergence of word-chains and combinatorial play, two-word utterances and combinatorial pretend, two-word utterances with rules and planning in pretend), but language and symbolic play development preceded drawing development. However, drawing activity developed through the same representational stages. The relationships among early language, play and drawing were discussed.

**Key words:** early language, symbolic play, drawing, the second year child, representation.

### 問 題

象徴機能はPiaget (1951, 1966) によって体系づけられ, その諸形式が1歳代に発達することが指摘されてきた。Piagetは現前していない事物や事象を表象的に想起していることを窺わせる1歳代の象徴機能の諸形式として延滞模倣, 象徴遊び, 描画, 心像, 言語を挙げている。近年これらの領域の中で言語と象徴遊びの関連が注目され, 広く認知発達の枠組みの下で検討されている (Bates, Benigni, Bretherton, Camaioni & Volterra, 1979; McCune-Nicolich, 1981, 1986; Ogura, 1991)。特に, McCune-Nicolich (1981, 1986) は Piaget理論の立場から象徴機能を基底に言語と象徴遊びの両者が現象的に共起することを提起し, 象徴遊びには言語と構造的に対応する5発達水準が設定できることを主張した。

McCune-Nicolichのこの仮説は象徴遊びと言語との時間的対応や相関を用いた研究から吟味されているが、例えば、Ogura (1991)ではこの仮説が1語発話期までは支持されるが、語連鎖が出現した後は行為系列が語連鎖に、プランのある遊びがルールのある2語発話に先行したことから、両者間にずれが見られると述べている。しかし、McCune-Nicolichの仮説は障害児を含めて広範に検討がなされ、象徴遊びと言語の間に発達過程の対応や相関が見られることが多数報告され、基本的、部分的に支持されているといえよう。

さて、象徴遊びは上記の言語発達との関連性を探る研究だけでなく、象徴遊びそれ自体の綿密な分析のために、脱中心化（自己に対する象徴遊びから他者や人形に対して象徴遊びを行う）や脱文脈化、統合化（象徴行動が系列化して統合される）の観点から（Fein, 1981; Fenson & Ramsay, 1980）、あるいは、広く社会的相互作用を加味した研究も行われ（Fiese, 1990）、豊かな知見が蓄積されている。

ところで、描画は言語や身振りと同様に、対象を意味し、指示する有力な表現媒体である（Werner & Kaplan, 1963）。しかし、描画発達の先行研究では初期描画を無意味ななぐり描き（錯画）と位置づけ、詳細な検討を試みてこなかった。Piagetら（1966）は象徴機能の諸形式を概説したなかで描画を象徴遊びと心像の中間に位置づけている。しかし、彼は描画発達を実証的に研究したのではなく、Luquet (1927)の理論をそのまま借用し、初期描画をなぐり描きや「偶然の写実性」によって説明している。このような従来の見解に対して、筆者（山形, 1988, 1993 a）は初期描画期を対象表現（事物や事象を絵として表す）を準備する時期と捉えて、この時期に対象表現の基礎を成す表象活動の萌芽と発展が見られることを明らかにした。描画は言語や身振りと併せて、幼児期における最も重要な表現的営みであるが、そのような活動の芽生えは1歳代に出現し、発展していくと考えられる。

本研究では1歳代の言語、象徴遊び、描画の発達過程を縦断研究から追跡して、この3者の発達過程に構造的な対応関係があるか、象徴機能における発達水準の出現順序に共通性が見られるかを検討する。これは言語と象徴遊びに関するMcCune-Nicolichの仮説を描画をも包含して拡張し、描画活動を言語や象徴遊びと関連づけて把握し、描画活動の特質を象徴機能の中に位置づける試みである。これまでの研究では言語、象徴遊び、描画の3者の対応関係やその多重作用は吟味されていない。また、1歳代の描画活動を象徴機能発達水準の観点から分析した研究も報告されていない。

ところで、対象表現としての描画は一般に事物や事象を画面上に変換して表示する活動と考えられる。幼児では対象表現を行う際に、模写や写生のように現前する対象を直接転写するのではなく、その心的表象を想起して描出すると推測される。そこで、本研究ではこのような対象表現の性格を踏まえて、眼前の対象を表現媒体を用いて直接転写する、あるいは対象の代理物（ままごとセットやミニカーなどの玩具は実物のミニチュアである）に依って表す場合よりも、対象を他の異なる事物に置換して表す場合（代置）や眼前にない対象

を新たに創出する場合、さらに行為や事象の連結（結合）構造成立に強調を置いて3者の関連性を調べる。Ogura では対象と象徴・表現媒体が表象を介して結合する1語発話期に言語と象徴遊びの間に対応関係を見出し、それ以後の段階ではBloom, Lifter & Broughton(1985)に従って両者は共働するとしている。本研究では描画活動を含めて3者の関係を調べることから、対象が表象を媒介に表現媒体と結びついた後の段階に焦点を当てることになろう。

本研究では子どもの自発的行動を家庭での遊び場面で観察することによって1歳代の言語、象徴遊び、描画発達に関する1児の縦断的資料をえて、表象活動としてのこの3者の構造的関係を検討する。3者の間には対応関係があるか、特に、描画と他の2者との間にはどのような関係が見られるかを明らかにする。さらに、この3者には象徴機能の発達水準に関して共通の発達過程が見られるかも併せて調べる。以上の検討から、本研究では1歳代の言語、象徴遊び、描画の関連性とその特質について考察を試みる。

## 方 法

**被験児** 女児T(1989年出生)。T児は大都市近郊に在住し、両親と本人の3人家族の長女である。本児は極めて健康で、成長や発達も順調であった。

**観察期間** 観察は原則として毎月1回筆者が家庭訪問して行った。観察期間は月齢12カ月(1990年3月)から30カ月(1991年9月)の計19カ月間である。本研究では1歳代の表象活動の発達を検討するために、そのなかの12～24カ月を分析対象として報告する。なお、TがVTR録画や筆者に慣れるように、観察に先立って、筆者はTの月齢7カ月から育児に参加し、母子との接触の機会を設定した。ただし、観察のための場面設定は12カ月から行われ、それまでは自由な育児場面であった。また、筆者による観察以外に、観察が2週間間隔になるように、Tの家族に毎月1回筆者の観察とほぼ同一状況下でVTR録画を依頼した。

**手続き** 観察はT児の自宅の一室で行い、観察時間は60分である。観察記録は部屋の一角に設置したビデオカメラによってVTR録画を行った。また、筆者による筆記記録も併用した。観察が実施された部屋には多種の玩具と描画道具を用意した。玩具は積み木・ままごとセット(コップ・皿・鍋・フライパン・スプーン・フォーク・包丁・ポット・トースター・ガスレンジ)・電話・身づくろいセット(櫛・ドライヤー・化粧道具)である。その他に、T児が家庭で使用している玩具も(ミニカー・人形・絵本・その他)自由に用いることが許された。描画道具は画紙(B4大)と筆記具(クレヨン・マジック・クーピーペンシル・ボールペンなど)である。

T児の母は観察場面に参加したが、母には日常生活と同様に自然に行動するようにお願い

いた。母はT児との遊びや描画活動に参加し、母子は玩具や描画道具を使って自由に遊ぶことが見られた。従って、本観察場面は比較的統制のゆるい状況下での観察といえよう。なお、筆者は観察中には原則としてビデオカメラの側において、被験児が筆者に働きかける場合を除き、介入しなかった。

**分析資料** 12～24カ月間の観察からえられた計13回の録画記録を家族による録画記録13回と合わせて、資料とした。これらの資料はビデオから転記して、言語と象徴遊び、描画に関する各行動を分析した。言語は60分の観察中に見られた子どもの自発的な言語産出をその発話状況を考慮して調べた。象徴遊びは母子相互交渉のなかで展開されたが、録画記録から象徴遊びを行った場面を抽出し、子どもの自発的行動を中心に検討した。象徴遊び場面は筆者による観察から合計55回、家族による観察から合計46回をえた。月齢毎の象徴遊び場面数の内訳はTABLE 1に挙げる。描画は録画記録から描画場面を抽出して資料とした。描画場面は以下に示す開始と終了に基づいて決定した。描画場面の開始は、母子が①筆記具や画紙を取り、描画の準備をする ②描画を他者に求める ③描画テーマを提案する ④描出を開始するのいずれかが見られた場合である。描画場面の終了は、母子が①筆記具を置く ②描出を終えて画紙をめくる ③新しい描画テーマを提案する ④描画終了を宣言するのいずれかが見られた場合である。月齢毎の描画場面数の内訳はTABLE 2に示す通りである。描画活動は象徴遊びと同様に母子相互交渉のなかで行われることが多く(Yamagata)、本報告では子ども単独場面と母子共同場面の両場面における描画活動を分析した。

TABLE 1 Number of sessions in symbolic play.

Age(months)		12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	Total
Observation	A	3	11	6	4	4	0	6	6	4	4	2	1	4	55
	B	5	0	0	3	3	10	10	2	6	2	3	2	0	46

Note. A was videotaped by author and B was by parent.

TABLE 2 Number of sessions in drawing activity.

Age(months)		12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	Total
Observation	A	7	3	2	20	32	0	12	17	20	33	20	12	23	201
	B	4	2	0	0	10	15	3	28	14	14	21	19	16	146

Note. A was videotaped by author and B was by parent.

**分析カテゴリー** 表象活動を分析するために、言語、象徴遊び、描画発達に関する上記資料を発達水準を示す以下のカテゴリーを設定し、初出月齢の出現時期を中心に分析した。ここで採用したカテゴリーは言語と象徴遊びに関しては McCune-Nicolich(1986)、Nelson(1973)、Ogura(1991)を参考に決定した。なお、描画発達との関連を検討するために、

新たに言語では非現前物命名と異なり語数 50 語の指標を、象徴遊びでは象徴要素の創出を加えた。描画発達に関しては山形の先行研究(1988,1992,1993 b)を踏まえてカテゴリーを選定した。

### (1) 言語産出分析のためのカテゴリー

- ①指示語 対象や事象を指し示す語が明確に出現した場合をいう。
- ②指示代名詞 対象や事象を代名詞(ココ、コレ、コッチ)で示す場合を指す。
- ③異なり語数 10 語と 50 語 異なった語が 60 分間に 10 語と 50 語以上産出された時期を指標とする。
- ④語連鎖 分離型の自立語+自立語(アーコレ)と自立語+付属語(ココヤ)が見られた場合をいう。
- ⑤2語発話 2語が連結して産出されるが、まだ、連結のルールが成立していない場合をいう。結合型の自立語+自立語の成立を指す。
- ⑥ルールのある2語発話 2語発話において2語間に連結ルールが成立している場合を指す。
- ⑦多語発話 2語以上の語が発話で使用される場合である。
- ⑧非現前物命名 現前しない対象や事象を命名する。

### (2) 象徴遊び分析のためのカテゴリー

- ①命名 対象を身振り・動作で適切に示す(コップで飲む)。
- ②自己へのふり遊び 自分が対象に働きかけて、ふりを示す。
- ③他者へのふり遊び 他者(母や人形)に対してふりをする。
- ④行為系列 一連の行為がシエマとしてふり遊びで出現する(コップにポットから注ぎ、コップを口に持って行き、飲むふりをする)。
- ⑤代置 ある対象を別の異なる対象に見立てる(クレヨンをエビフライに見立てる)。
- ⑥異行為系列結合 2つ以上の異なる一連の行為が結合されて系列をなす(ブラシで自己と母の爪を塗り、髪にドライヤーを当てて乾かし、髪をとく)。
- ⑦プランのあるふり遊び 行為以前に計画や構想を持ったふり遊びを行う。探索や提案、準備などが見られる場合を指す。
- ⑧象徴要素の創出 現前しない事物や対象を作り出して、ふり遊びをする場合をいう。

### (3) 描画活動分析のためのカテゴリー

描画における対象表現では対象の部分的特徴が画面上に変換されて構成要素として描出されたり(山形, 1992,1993), 母子対人場面では母子が共同で描画活動を行うことが観察さ

れた。そこで以下のような分析カテゴリーを設定した。

- ①他者に対して描画テーマを提案 対象表現のために描画テーマを提案して、他者に描画を求める。
- ②自己による描画テーマの提案 子供自身が対象表現のために描画テーマを表明する。
- ③他者の描画の特定部分に描く 他者が描いた対象の特定部分に子供が線描を付加して描く。
- ④表示ルール無 対象を描こうとするが、対象の部分を表わす構成要素の体制化が見られない場合をいう。特に、対象の対を成す特徴（目、耳など）に関して検討する。
- ⑤表示ルール有 構成要素の体制化が見られる場合をいう。特に、顔では目や耳、車では車輪やタイヤのような対を成す特徴をまとめて描く場合を指す。
- ⑥部分的プラン 対象の構成要素を成す部分を計画を持って描く。
- ⑦全体プラン 対象の構成要素全体を計画を持って描出する。

上記のカテゴリーに基づいて資料を判定し、各カテゴリーの初出月齢を求めた。各カテゴリーの出現時期を決定する際には言語では模倣による発話を、象徴遊びでは母によって誘発された子供の行動を除外するように注意し、子供の自発的行動を中心に分析した。なお、出現時期の認定は言語と象徴遊びに関しては資料の半分を、描画に関しては全資料を独立な二人の判定者が判定した。各々の一致率は高く、言語 82.69%、象徴遊び 83.33%、描画 90.91% であった。判定が不一致な場合には言語と象徴遊びでは他の判定者に判断を委ねた。描画の判定では2名の判定者が議論して決定した。

## 結果と考察

### 1. 言語、象徴遊び、描画の各カテゴリーの出現時期の分析

#### (1) 言語発達

言語発達をカテゴリーに従って分析し、各カテゴリーの初出月齢の結果をTABLE 3に示す。以下では言語の各カテゴリーを出現順にその観察事例を中心に見ていく。

T児は母の報告によると、既に10-20（月齢-日齢を示す）以前に初語（ネンネ）が見られたが、初回の観察場面（12-9）では明確な発語を発しなかった。観察場面12-30において初めて“ネンネンネンネ”や“イヤーヤン”などの言語が発せられた。

指示語は観察場面12-30に電話で遊んでいる時に母への呼び掛け“アチャーチャン”や遊びの際に“クレヨン”が発せられた。指示語も母の報告によると、既に10-20以前に初出していた。指示代名詞の初出はTが14-25に箱を母の所へ持ってきて、“コレコレ”

といった場合に見られた。また, 15-19 にはTは母にクレヨンを渡して “ココ” と画紙上を指し, 描画を求めることが観察された。以後, コレ, ココ, コッチなどの指示代名詞が頻出する。

語連鎖が初めて出現したのは 15-9 であり, Tは手にクレヨンが付いて, 汚れたのを見て, “ウーコレ” といった場合である。また, 同一月齢には “アッコエ (コレ)” も見られた。これらは感嘆を伴った分離型の語連鎖である。

異なり語数 10 語が見られたのは 16-7 であった。その内訳はチャーチャン, ココ, ハイ, イヤーン, ワンワン, コレ, オバチャン, ジイチャン, ドーズ, カッコウ(かこう), ウチャキチャンの合計 11 語である。本結果では異なり語数 10 語は指示代名詞, 語連鎖に続いて 16 カ月に出現した。Ogura では指示代名詞と 10 語が同時期に出現し(4 名中 3 名で 15 カ月までに出現した), 語連鎖は 4 名中 3 名で約 3 週遅れて生じた。本結果は異なり語数で Ogura の結果と違いが見られた。これまでの研究では 10 語の出現は平均 15 カ月が多い (Bloom, 1993)。異なり語数 10 語の出現が本研究ではやや遅れたことが推測される。参考までに異なり語数の結果を観察場面の月齢毎に Fig. 1 に挙げる。この結果は Ogura の 90 分間における被験児平均の異なり語数に比較すると, 1 歳前半においてやや増加傾向が緩やかである。本研究では観察時間 60 分中に出現した言語を指標にしたが, 10 語の研究結果間の相違は個人差要因に加えて, 標本抽出時間に帰することができるかもしれない。

非現前物命名は 17-9 に電話で遊んでいる時に “ジイチャン” と話し掛けることが見ら

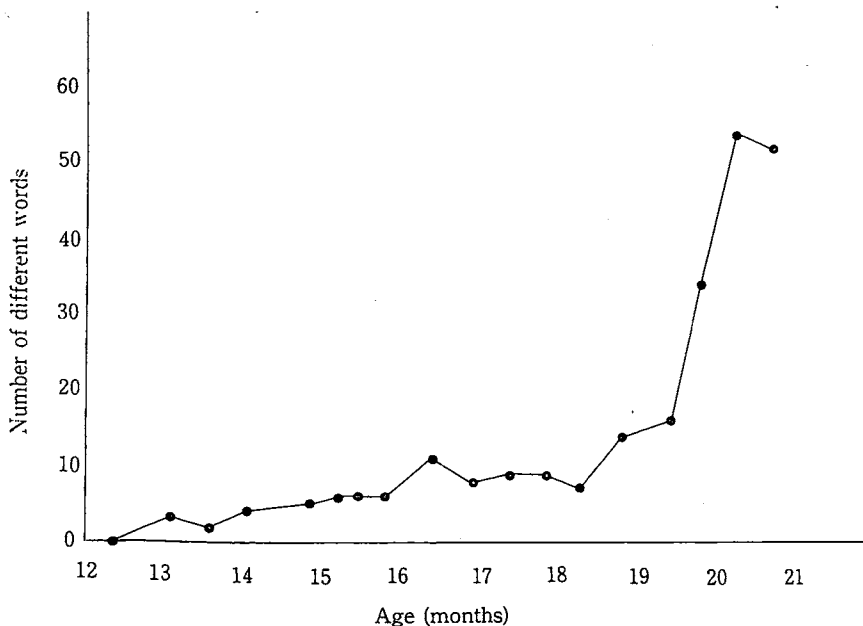


Fig. 1 Number of different words in each age (months).

れたのが最初である。また、Tがコンパクトを見つけた時に初めて“アッタ”が17-20に発せられた。Tの“アッタ”の出現は指示代名詞や10語と同時期に見出したOguraよりも遅い。

2語発話では18-6にルールのない2語発話が“プーシタ”と発せられたが、ルールのある2語発話は19-24に“ココジャー”“ココへ”“ココイテ”“ココブー”“ココニワンワン”が観察された。ココと多数の異なる語がココ+Xの型をとって連結された。ココは2語発話において一定の位置に出現し、異なる語と連結されて、位置格+Xの意味で使用された。また、“ココジャー”は“ジュージュ(ジュース)ジャー”と発せられ、X+ジャーの型で異なる語とも連結された。また、この時期には“パパココ”“チャーチャンココ”も観察された。ココ+XとX+ココの両者の型がこの段階で出現したことを示している。さらに、“コレパパ”が19-24に初出し、続く20-10には“コレチャ(茶)”や“コレブー”が出現して、コレ+X型も形成された。

異なり語数50語の出現はFig. 1に示すように、20-10であった。異なり語数はFig. 1から急激に19カ月から20カ月にかけて増加したことを示している。この時期は丁度言語の爆発期に該当するといえるが、他の研究では少し早く平均19カ月代に50語に到達したとの報告が多い(Bloom, 1993)。多語発話は同一月齢内の20-27に“ママココヘキテ”の3語発話が出現し、以後多語発話が頻繁に見られた。

## (2) 象徴遊びの発達

TABLE 3に象徴遊びに関する各カテゴリー毎の初出月齢を示す。初回の観察場面において既に事物への身振りによる命名行為が出現した。Tは12-9に玩具の電話受話器を取り上げて、耳に当てることが見られた。同じ時期にTはままごとセットを使って遊んでいた時、コップをスプーンで混ぜて、口へ持っていき、食べるふりをすることが1回見られた。これは自己へのふり遊びと考えられる。しかし、この時期にはまだ口にスプーンを入れてくわえることが多く、その点でふり遊びと認め難い行動も頻出した。さらに、Tは12-30には母にコップを差し出して飲ませ、他者へのふりが見られた。Tは15-6には絵本に描かれた食べ物を手でつかむふりをし、それを人形に与えることが見られた。人形へのふり遊びがこのように生起し、自己から他者へとふりの脱中心化が出現した。

15-19にはTはポットでコップに注ぎ、次にコップを口へ持って行って飲み、おいしそうな口をした。この一連の行為は飲むというシエマの行為系列によるふり遊びといえよう。この観察事例から、ままごと遊びの飲食に関する知識が形成され始めたことが窺える。

代置は17-9に初めて観察された。T児はスヌーピーの人形を箱に入れて寝かせ、クレヨンのケースの蓋を布団の代わりに使用して、スヌーピーに被せた。そして、スヌーピーを寝かせるためにトントンと軽く蓋を叩くことが見られた。この事例ではクレヨンのケース



TABLE 3 Age of emergence of categories in early language, symbolic play and drawing development.

Age(months)	Language	Symbolic play	Drawing
12		<ul style="list-style-type: none"> <li>Conventional naming act</li> <li>Self-pretence</li> </ul>	
13	<ul style="list-style-type: none"> <li>Naming word</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Pretence to other person</li> </ul>	
14			
15	<ul style="list-style-type: none"> <li>Demonstrative pronoun</li> <li>Word-chains</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Pretence to dolls</li> <li>Combinatorial play</li> </ul>	
16	<ul style="list-style-type: none"> <li>10 different words</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>Suggesting drawing themes to other person</li> </ul>
17	<ul style="list-style-type: none"> <li>Naming absent objects</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Substitution</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Drawing on the other's drawing</li> </ul>
18	<ul style="list-style-type: none"> <li>Two-word utterances without rule</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>Drawing with naming</li> </ul>
19		<ul style="list-style-type: none"> <li>Combinatorial play with combined themes.</li> <li>Planning</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Drawing element without rule</li> </ul>
20	<ul style="list-style-type: none"> <li>Rule-governed two-word utterances</li> <li>50 different words</li> </ul>		
21	<ul style="list-style-type: none"> <li>Multiple-word utterances</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>Rule-governed drawing</li> </ul>
22			<ul style="list-style-type: none"> <li>Planning (parts)</li> </ul>
23		<ul style="list-style-type: none"> <li>Creation of symbolic elements</li> </ul>	
24			<ul style="list-style-type: none"> <li>Planning (whole)</li> </ul>

の蓋が布団に見立てられ、置き換えられたことを示している。

T児が異行為系列結合からなるふり遊び、すなわち2つ以上の一連の異なる行為系列を組み合わせて、ふり遊びを行ったのは19-6であった。Tは母と自分の爪にマニキュアを塗るようにブラシを当て、次に、母の髪にドライヤーを当てて乾かし、髪を櫛でとくといた多シエマから構成されたふり遊びが見られた。これはいずれも身づくろいに関係する行為であるが、マニキュアを塗る、髪を乾かす、櫛でとくの3種の異なる行為系列を結合し、より一層高次で複雑な行為を形成した。

Tが最初にプランを持ってふり遊びを行ったのは19-6であった。Tは身づくろいセットで遊び始めたが、“ワンワン”とイヌを探し、周囲を見回した。母が犬の代わりにラスカルの人形をTに差し出すと、Tはラスカルの手の爪にブラシを当てて塗り、マニキュアをした。次にTが犬を見つけて指さしたので、母が犬をとってやる。Tは犬の爪にもブラシを当て、塗ることが観察された。この観察事例は犬の爪をブラシで塗ることを計画し、現前にない犬を予期的に探索したことを示している。これは身づくろいに関する一連の行為系列中の一つの事象を事前に予見したものと推定でき、プランのあるふり遊びといえよう。

22-19には象徴要素の創出が観察された。T児は画紙に赤色のクレヨンで円状の描線を描き、その上にままごとセットのガスレンジを置き、“ヒヨオイタ”といった。母が「火をおいたの」というと、“ココ”と指す。母が「そこなに」と尋ねると、Tは“アナ”と答え、さらに、“ココ アチイ”という。この事例では赤色の円状線が火と見なされ、玩具のガスレンジがその上に置かれたわけであるが、描線で火を作り出し、火のつもりでままごと遊びが行われたといえる。また、Tは25-20には母の髪をとき、ドライヤーを当てて、“プー”とやって髪を乾かすふりをした。母は「もう乾いたの?」と尋ねたが、その際、Tはテーブルの脚のところへ行き、そこで手でひねるふりをし、さらにブラシを濡らすふりもした。そして、再び母の髪をそのブラシでとくことが見られた。この行為はテーブルの脚が水道と見立てられたと推定されるが、T児はそこに水道栓・蛇口を想定して手でそれをひねり、水を出して濡らした。この水道栓はTによって想定され、創出された象徴要素と考えられよう。

### (3) 描画発達

1歳前後から開始される描画活動はその初期段階ではなぐり描きや錯画と特徴づけられるが(山形, 1988; Yamagata), 子どもは次第に対象を描くように発達していく。本研究では対象表現としての描画に限定して描画活動を分析し、言語や象徴遊びとの関連を検討する。本描画資料の分析は山形(1992)やYamagataに詳しいが、その分析結果を踏まえて、ここでは対象表現における構成活動の発達分析を中心に吟味する。

各カテゴリーの初出月齢をTABLE 3に示す。発達初期には子どもは当然のことながら対象表現ができないが、対人場面では母に描画テーマを与えて、対象表現を求めることが見られた。Tが初めて母に描画テーマを与えたのは16-7であった。Tは母にクレヨンを手渡し、「ウンチャンパン」といって、ウサギを描くことを求めた。この観察以前に、Tは既に母に筆記具を差し出して、描画を求めることが見られ(12-9)、また、母は対象表現を子供のために描くことも行った。Tは自分では独力で対象を描出できないが、他者に描画を依頼して、他者の手を借りて対象表現を実現したといえよう。このことはTが描線を媒体に用いて対象表現が可能なことを理解し、また、既に表現意図を有していることも示唆していると考えられる。

次に、T児は18-11に自ら描画テーマを表明して、自力で描画活動を行った。Tはクレヨンを手で触っていたが、母が「なにかくかなあ」と尋ねると、「シュー」と答えた。母が「シューするの。花火がいいの」というと、Tは「シュー」といって、画紙上に点を打っていった。この花火の描出は本観察の5日前に(18-6)、母が「シュー」といいながら多数の点を描いて、花火を描出したことに影響を受けていると推定される。現在の観察事例はTによる最初の対象表現を示しているが、この描出は描画のみから表示対象を同定することが困難なものであった。

Tは母の描いた描画に参加して、そこに何かを描くことが16-7に見られたが、さらに、このような描出活動が発展して、17-20には母の描画の特定部上に線描を付加することが観察された。Tは母が描いたウサギ画の耳と口の上に線描を付加した。この観察はT児が母と描画活動を共有して、描画に参入したことを示すと解釈できよう。

Tが対象をその構成要素を用いて描いたのは18-11であった。Tは母にウサギを描くように勧められて、描いたが、その時、トンと強く点を1つ打つように描いた。母がTのその描出に「あっ、おメメかいたの」と意味づけを与えた。この観察事例は母の意味づけから、Tが目を描いたと推定されるが、それは対として左右の目を描いたのではなかった。目の描出では左右の目をひとつの対にまとめて表示することが必要であるが、本段階ではまだ対として構成要素を連結して体制化することができないことを示している。その点で、この観察は描画構成活動における構成要素間のルールがまだ十分に把握されていないことを示唆しているといえる。その上、本事例は母の意味づけから目を描いたと推測され、Tの自発的行動から対象表現を確定したものでなかった。Tの自発的行動によるルールのない構成要素の描出は19-6にTがウサギの耳を「シュー」といって多数の縦線で描き、母が「シュー そう 長いお耳ねえ」といった場合がこれに該当する。

描画の構成要素を最初にルールに基づいて連結し、描出したのは21-8に目を対で表示した場合であった。T児はクレヨンをもって、グルグルと円状の描線を描いていたが、「ホラ」といってグルグルと円状の線を描き、「メ」といって母の方を見た。次に、Tは「メ」といっ

て、短線を2本描き、“メ”という。後者の場合には目が対で表示され、構成要素の連結に関するルールがここに成立したことを示している。

プランをもって描画活動を行った最初は22-8であった。Tは母の描画に途中から参入し、対象の特定部分を描き、共同作業で描画を完成することが見られた。ここで役割交代して特定部分を描出したことはTが描画構成活動においてその特定部分に関するプランをもっており、予期的に役割交代したことを意味すると考えられる。母が「つの中の2本…」と歌いながら描いた赤鬼の輪郭内に、Tは小円状の描線を2つ描いた。母がその描出に対して「上手にかいたねえ。2かいたねえ 赤鬼上手ね」というと、Tも“アカオニ ニ”という。母は「赤鬼 2あるねえ。おメも2あるねえ」という。

上記のプランをもった描画活動は対象の部分描出に関するプランの成立を指しているが、対象表現全体が描かれたのは24-10であった。Tは顔を自力で構成要素を体制化して描出した。

## 2. 言語、象徴遊び、描画発達の関係分析

言語、象徴遊び、描画の3者に関する各カテゴリーの初出月齢間関係を見る。

観察初回(12-9)には明確な指示語は観察場面で出現しなかったが、母の報告では既に10-20に指示語が見られ、象徴遊びでは12-9に対象に対する命名行為が身振りでも出現した。本研究は12カ月前の言語と象徴遊びを観察場面で検討しておらず、指示語と対象への命名行為が同時期に出現したかどうかは不明である。しかしながら、言語と象徴遊びの両者で対象とそれを意味する語や身振りとの対関係が12カ月時に既に形成されていることが窺える。これはMcCune-Nicolichの水準1の前象徴シエマから水準2の自動象徴的シエマへの発達に該当する。ただし、この段階では喃語などの発声がなお頻出し、事物や対象に対する操作も非慣用的な使用がまだ多く見られ、指示語も命名行為も少数であった。

また、同時期には自己へのふりが出現し(12-9)、さらに他者へのふりも12-30に観察された。これはMcCune-Nicolichが定式化した水準2の自動象徴的シエマから水準3の脱中心化した象徴ゲームへの移行を示すものである。この水準2や3の段階では水準1の前象徴シエマよりも対象や事象を遊び的に(playfully)使用し、対象の意味を覚知していることが窺われる。水準2の自己へのふり遊びでは対象や事象を一つの単位として表象することができ、言語では単一の語が出現する。本結果では指示語、命名、自己へのふりが12カ月に観察されている。水準3では対象に対する行為が自己だけでなく、他者にも拡大して適用され、対象や事象が一般化され、また、分化して把握された。本結果では他者へのふりは母子対人場面で検討したこともあり、自己へのふりと同一月齢内で観察された。なお人形へのふりは2カ月以上の間隔を置いて出現したが、これは母子対人場面で観察を

行ったために母を相手に象徴遊びが頻繁に展開されたことから、他者よりも人形へのふりが遅れたと考えられる。シエマはこのように自己から他者へ適用範囲を拡げて脱中心化されるに伴い、より一般的で、抽象的なものへ、また、より分化したものになっていくと考えられる。

脱中心化に伴って、Tでは指示代名詞が14-25に初出し、次いで、語連鎖や異なり語数10語が順次生じた。Oguraでは指示代名詞と異なり語数10語以上は4児で同じ時期に、語連鎖は3児でその3週後に出現し、1児はこの3指標が同じ日に見られた。本結果では約1カ月半の期間に上記の順序で各指標の成立を見ており、特に、10語の出現は時期的にずれが見られた。このずれに関しては既に述べたように標本抽出時間や言語発達の個人差を反映している可能性が指摘されよう。

一方、象徴遊びでは語連鎖とほぼ同時期に人形へのふりが、約2週遅れて行為系列が観察された。McCune-Nicolichは水準4の結合的象徴ゲームに該当する行為系列が語連鎖と共起することを主張したが、本結果はこの2者に関してはMcCune-Nicolich説とほぼ一致した。

ところで、Tでは指示代名詞はその発話状況を見ると、母のところへ箱を持ってきて、その箱を指して“コレ”が、特定の場所に座ることを指して“ココ”が発せられ、対象や事物が現前に在り、それを指す場合に使用されていたと推定される。指示代名詞は本来対象を直接意味する命名ではなく、対象から一定の距離をとって示すものであるから、脱文脈化の萌芽を表していると考えられる。しかし、指示代名詞は対象から一定の距離をとっているが、依然現前の対象を指していることにかわりなく、その点で現前に規定されているともいえよう。Tはコレ(14-25)とココ(15-19)を早期に、コッチ(19-6)とアッチ(20-10)を遅れて初出した。コレとココは現前の状況や事象を指し、他方、アッチはコッチとの対照の下に眼前にない離れた場所を指し示すものである。従って、コッチとアッチは遅れて出現すると考えられる。指示代名詞はこのように種類別の詳細な分析が必要と思われるが、しかしながら、指示代名詞の出現は脱文脈化の始まりを意味しているともいえよう。

描画ではなぐり描きが12~19カ月で頻出したとはいえ(Yamagata)、10語と同時期に他者に描画テーマを付与し、対象表現を求めることが観察された。Tはこの時期には独力による対象表現がまだ不可能であったが、対象を画面上に変換して表すことができることを理解し始め、対象の名前を表明して他者に描画を求めた。本結果では他者に描画テーマを付与し、対象表現を求める行動が異なり語数10語と共起しているが、これはTがこの段階に対象を音声、身振り、描線といった表現媒体で表すことができることを確実に理解したことを示唆するものと考えられる。

さて、代置は非現前物命名と同じ17-9に出現したことが明らかにされている。代置と非

現前物命名はいずれも現前に存在しない対象や事象をそのイメージ・表象を喚起して想起していることを示すものである。従って、この両指標は現前する文脈を離れて対象を想起している点で対象の脱文脈を意味している。Tは現前の対象である蓋に布団のイメージを重ね、さらに、電話で見えない人物に呼び掛けた。また、Tではこの両指標と同一月齢内に、探索していた対象や事象を発見した時に発せられる“アッ”が観察された。代置はMcCune-Nicolichによれば水準5の内的に方向づけられた象徴ゲームの指標に挙げられ、自然観察研究では20~22カ月に出現すると報告されている(McCune-Nicolich, 1981)。星・栗山・進見・日笠(1988)では個人差は大きいものの、19カ月以後に代置が出現した(星らのTABLE 2)。Oguraでは代置は1児を除いて指示代名詞・異なり語数10語と共起し、3児で13~16ヶ月に報告している。本観察や星らと比較すると、Oguraの代置の結果はやや早期である。また、Oguraでは指示代名詞、10語、語連鎖と人形へのふり、行為系列、代置が3週内の幅で出現したが、本結果ではこれらの指標の出現幅が2カ月以上と拡大している。このような相違はOguraの観察が3児で7カ月から開始され、象徴遊びや事物操作の機会が発達的に早期から定期的に与えられたことや子供と大人の相互交渉の様式が関与している可能性が推測される。本観察では母が積極的に遊びを展開し、そこに子供を誘導することが頻出し、Tはその母の行動を模倣を通じて取り込んでいく様子が見られた。星らは実験者の誘導による行動や模倣を抑制する目的のために、実験者は子供の働きかけに回答するにとどめるように配慮している。0歳代から1歳代前半では子供が一人で玩具で遊ぶことは困難と予想されるから、観察場面での実験者や養育者の子供に対する対応の仕方や玩具の提示方法が指標の出現時期に重要な影響を与えたと予想される。

描画では代置や非現前物命名が出現した11日後に、他者の描画の特定部に描線を描き、次いで、自己に描画テーマを付与して描くことが観察された。描画は描線を表現媒体に使用し、対象を画面上に置換して表すものであるが、自己の線描に命名して対象表現を行おうとしたこの行動は現前に存在しない対象や事象のイメージを喚起し、描線に置換しようとした点で代置や非現前物命名と同様の脱文脈化を示していると考えられる。ただし、ここでは対象を描線で表して変換したが、対象の線構成活動はまだ構成要素を対象表現のために体制化するには到っていない。

さて、言語でルールのない2語発話が初出したのは18-6であったが、象徴遊びでは19-6に異行為系列結合とプランが、描画では同一時期に表示ルール無が見られた。ルールのない2語発話と異行為系列結合はMcCune-Nicolichの水準4に該当する語連鎖と行為系列の一層発展した形の連結といえるが、本観察では2語発話が異行為系列結合より1カ月早く出現した。この結果はMcCune-Nicolichの仮説に合致していない。また、Oguraでは3児で2語発話と異行為系列結合が共起し、1児では後者が遅れて出現した。本観察はこの1児と同様な結果であった。しかし、描画では対象の対を成す構成要素において体制化さ

れた連結は見られず、言語や象徴遊びの連結成立よりもその発達に遅れが窺えた。

McCune-Nicolich では遊びのプランニングは水準5に出現し、行為遂行前に心的に象徴ゲームが生起し、行為の意図が象徴遊びを方向づけるとされた。また、水準5では象徴要素は体制化され、階層的になることも指摘されている。本観察ではプランニングと異行為系列結合の共起が見られ、Ogura の4児中2児と同様な結果をえた。他方、言語ではルールのある2語発話が19-24に成立し、異なり語数50語は20-10に、多語発話は20-27に出現した。言語でのルールのある2語発話と象徴遊びにおけるプランは約2週間のずれがその出現で見られたが、両者は同一月齢内に生じた。この結果はMcCune-Nicolich の仮説とほぼ一致したといえよう。ルールのある2語発話はシンタックスの形成を示すが、シンタックスは語を心的に結合することを要求すると考えられるから、プランのある遊びの成立と関連している。ただし、本結果はルールのある2語発話がプランニングに4児で3~11週遅れたOgura の結果と異なっていた。

異なり語数50語はルールのある2語発話成立後に達成され、言語の爆発期が観察された。言語の爆発は一般的な事物に関する知識や特定の事物・事象の概念発達と関与していることが指摘されている(Nelson, 1985; Bloom, 1993)。異なり語数50語や多語発話の出現後に、描画では表示ルール有が21-8に観察された。これは言語や象徴遊びでのルールのある2語発話や異行為系列結合の象徴要素の体制化された連結よりも遅い出現であったが、対象表現では特定の対象を描出する場合に一般に抽象化した概念的図式で描くことを求められる。その点で、対象の表示ルールが対象や事象の概念的把握を示す異なり語数50語達成後に出現したことは興味深い。

描画において構成要素に対するプランが観察されたのは22-8、さらに客観的に同定可能な対象表現が自力で達成されたのは24カ月に入ってからであった。これは言語や象徴遊びにおけるプランの観察よりも遅れている。象徴遊びでは描画でのプランの出現に約10日遅れて、象徴要素の創出が22-19に見られた。

## 討 論

Tでは言語と象徴遊びは語連鎖と行為系列、非現前物命名と代置、ルールのある2語発話とプランが同一時期あるいは約2週間差で対応して出現したが、ルールのない2語発話と異行為系列結合の出現には対応が見られず、McCune-Nicolich の仮説は部分的に支持されたといえよう。本結果をOgura の結果と比較すると、10語と代置ならびに“アッタ”で出現時期にずれが見られ、語連鎖と行為系列の出現における3児、ルールのない2語発話と異行為系列結合の出現における3児、ルールのある2語発話とプランの出現における4児との間に相違がえられた。McCune-Nicolich 仮説に合致した指標に関してはこのよ

うに本研究とOguraの結果で違いがあったが、しかしながら、本研究結果もMcCune-Nicolichの仮説を部分的に支持していると考えられる。

さて、本結果は自由な母子遊び場面における資料から結果をえたために、言語と象徴遊びの 카테고리間の共起を厳密に解釈する立場に立つのではなく、約2週間の出現時期のずれを許容できるものと考えた。時間的対応という方法を用いて検討する場合、時間対応を厳密な基準で考えるのか、緩やか基準に基づくのか、緩やかな基準を採用するならばどの程度の幅は許容されるのかを明確にし、研究者間で合意が要請されるだろう。また、縦断研究では研究方法、観察の開始とその期間、母子相互交渉の様式、玩具の種類やその提示法の違いが研究結果に加算的に微妙に影響し、カテゴリの出現順序や出現時期に影響を与えたと推測される。上記の研究でのカテゴリ出現時期の相違や言語と象徴遊びの各カテゴリ間における時期的対応関係の有無はこれらの要因に左右された可能性があるのではないだろうか。

ところで、従来の研究では各カテゴリの出現時期を指標に取り上げて分析を行っているが、カテゴリの内容に関しても吟味する必要があるだろう。例えば、代置はある対象を異なる別の事物に置換して表すことを意味する指標である。しかし、象徴遊びで使用されるままごとセットは実物のミニチュアであり、このような玩具の使用はそれ自体既に代置といえる。さらに、代置には現前しない事物を置換対象として選ぶ場合や現前する事物によって置換する場合が挙げられる。これらの代置では置換する水準に違いがあると推測される。最近精力的に多数の研究が行われている心の理論でも2重表象として代置を議論している。このように、カテゴリの内容には幾つかの水準を含むと考えられるから、各カテゴリや指標の内容を詳細に吟味することが不可欠といえよう。

次に、言語と象徴遊びに加えて、描画発達を検討する。描画の各カテゴリの出現は言語や象徴遊びに比較してどの段階においても遅れが見られた。しかし、描画のカテゴリの出現順序の内容は言語や象徴遊びと同様な発達過程が窺われた。描画ではまず対象表現が理解され、次に対象が描線を表現媒体にして画面上に変換され、描出される。描画の線構成活動では構成要素の体制化が見られない段階から、次にルールのある構成活動が成立し、プランが出現する段階へと移行して発達した。描画のこのような発達過程は言語や象徴遊びで観察された発達水準の発達過程と対応している。ただし、描画の発達速度が言語や象徴遊びと対応せず、遅れたのは、描画活動が対象や事象を音声や身振りで直接表し、対関係を形成するのではなく、その心的表象を描線によって表すその性格にあると思われる。描画では一般に現前していない対象をその心的表象によって画面上に変換して表示するが、このような活動は言語や象徴遊びに比較すると、脱文脈化が最初から要請されているといえるだろう。その上、対象表現で 사용되는表現媒体は音声や身振りよりも多くの運動統制を必要とする描線であった。対象表現ではこの描線を使用して線構成活動を行って、対



象を画面上に描いていく。従って、言語や象徴遊びに含まれていないこれらの活動が加わるために、描画は遅れて出現したと推測される。脱文脈化や運動発達、線構成活動のいずれが描画発達の遅れに関与しているのかは現在明らかではない。これらの問題は今後の検討課題である。

言語や象徴遊びの発達が描画に先行した上記の発見的事実はその結果として言語や象徴遊びが描画発達に影響を与えた可能性をも示唆している。特に、本研究では代置と非現前物命名が子どもの対象表現の開始に、ルールのない2語発話や異行為系列結合が描画表示ルール無に、ルールのある2語発話やプランが描画表示ルール有に先行して出現したことはその構造的内容に関連性が存在することから、言語や象徴遊びが象徴機能を基盤に描画を先導する可能性を指し示している。この3者の関係は1歳代のみならず、描画活動を言語で補完するなどの報告も年長幼児で行われ、広範な年齢で認められるようである。発達に伴って、この3者がどのように関連を持ちながら発達していくのか、その関連の有り方や性質を解明することは表現活動の発達を理解する上で重要な問題と思われる。

本研究では言語、象徴遊び、描画発達における象徴機能発達水準の関係分析を行い、前2者は詳細な点では相違があるものの、ほぼ時間的対応関係が見られたが、描画はこの2者に時間的に後続することが示された。この結果は1児の縦断観察からえられたが、今後、多数の被験児による観察資料と実験研究を蓄積することから確認し、一般化していくことが必要であろう。

## 引用文献

- Bates, E., Benigni, L., Bretherton, I., Camaioni, L. & Volterra, V. 1979 The emergence of symbols: cognition and communication in infancy. New York: Academic Press.
- Bloom, L., Lifter, K., & Broughton, J. 1985 The convergence of early cognition and language in the second year of life: Problems in conceptualization and measurement. In Barrett, M.D. (Ed.) Children's single word speech. New York: John Wiley & Sons.
- Bloom, L. 1993 The transition from infancy to language. Cambridge University Press.
- Fein, G. 1981 Pretend play in childhood: an integrative review. *Child Development*, 52, 1095-1118.
- Fenson, L., & Ramsay, D.S. 1980 Decentration and integration of the child's play in the second year. *Child Development*, 51, 171-178.
- Fiese, B.H. 1990 Playful relationships: A contextual analysis of mother-toddler interaction and symbolic play. *Child Development*, 61, 1648-1656.
- 星 三和子・栗山容子・進見元子・日笠摩子 1988 物を扱う遊びにおける象徴機能の発達水準 教育心理学研究 36, 345-351.
- Luquet, G.H. 1927 Le dessin enfantin. Paris: Alcan.
- McCune-Nicolich, L. 1981 Toward symbolic functioning: structure of early pretend games and potential parallels with language. *Child Development*, 52, 785-797.
- McCune-Nicolich, L. 1986 Play-language relationships: implications for a theory of symbolic

- development. In Gottfried, A. & Brown, C. C. (Eds.) Play interactions. Lexington Books.
- Nelson, K. 1973 Structure and strategy in learning to talk. *Monographs of Society for Research in Child Development*, 38.
- Nelson, K. 1985 Making sense: The acquisition of shared meaning. New York: Academic Press.
- Ogura, T. 1991 A longitudinal study of the relationship between early language development and play development. *Journal of Child Language*, 18, 273-294.
- Piaget, J. 1951 Play, dreams and imitation in childhood. Routledge and Kegan Paul.
- Piaget, J. & Inhelder, B. 1966 La psychologie de l'enfant. P.U.F.
- Werner, H. & Kaplan, B. 1963 Symbol formation. New York: Wiley.
- 山形恭子 1988 0～3歳の描画における表象活動の分析 教育心理学研究 36, 201-209.
- 山形恭子 1992 表示ルールの生成と描画の構成属性 日本発達心理学会第3回大会発表論文集, 260.
- 山形恭子 1993 a 1,2歳児の対象表現における描画活動の発達 -イメージの生成とその変容- 認知科学の発展 6, 119-141. 講談社.
- 山形恭子 1993 b 表示ルールの描画における生成過程の検討 日本心理学会第57回大会発表論文集, 253.
- Yamagata, K. 1994 Representational activity during mother-child interaction: the scribbling stage of drawing. (準備中)

## 付 記

本論文は日本心理学会第55回大会(1992)で発表した報告を再分析してまとめたものである。長期間にわたる資料収集に多大な御協力を頂いた対象児ならびに御両親に心から感謝致します。また、嵯峨美術短期大学高橋依子さんには研究を遂行する上で御配慮を頂いたことを深く御礼申し上げます。